

ないよ。どんなことでもいたしましよで、おいておくれよ、おば様の元に」言つてお弓の袂たもとにすがる。聞くにお弓はどうたまたらうで、母子抱きあひただ泣くばかり。いつその思ひで打ち明けやうか、迷ふ思案の女の心。いいえとめてはお為がわるい、きりきりお弓は気を取り直し、家に立ち寄り、わが錢箱の金を取り出し、紙に包み、無理に持たせて髪撫ぜあげて、ぜひに帰れと追いやりながら、娘おつるが泣きじやくりつつ、腹の伏鐘ふしねちりりと鳴らし、後振り返りて立ちどまりつつ、帰る姿のヤレかはいやの。ここで別れて又いつの日に、会マへぬマことさへできないものと、連れて帰りて名乗らんものと、はだし走りではや馳けて出る。

第二節 楽譜の部

一 熊野町の主産業である筆づくりは、各家庭内で個々に行うのが常態であるため、筆づくりの作業の中から歌が生まれる可能性は少ない。しかし本編に収録した作業歌は、長年月の伝承を経たものであることは確かである。

二 地づき歌は、呉市の本庄水源池が築造される際、各地から多くの土木作業者がこの地に集まり、その人たちの口から本町に広まったと言われている。ラジオも普及していない当時のことなので、専ら口誦により伝承された。そのため、伝承者によって同一民謡でもいくつの変容が見られる。

三 神楽踊の歌は、今日町内有志によってこれが保存伝承にとめており、また神社の年中行事としても大切にされているが、往時の盛大さは無くなった。しかしこの歌はかつて田の草取り、畑仕事、筆づくりの仕事をすすめる時も、時を問わず愛唱されたものであり、今も根強い愛好者がいる。神社の境内で円陣になって歌い、一般

の盆踊の音頭のごとく特定の歌手によって歌われるものではない。歌は太鼓にあわせて踊りながら全員で歌われる。長い物語りの歌詞が、皆に覚えられているのも、この歌が大切にされ愛されていたことを物語っているといえよう。

四 神楽踊の採譜について、

1 歌は金谷誠一、中村周平、藤本勝之、津田トキ、清代アキヨ、寺垣内文人氏等、当時の第一人者的な方の歌から採録した。

2 各区には、それぞれの区で歌う歌がきまっております(複数)、本編には、各区とも一曲のみの主要部分を掲載した。

3 曲は日本音階によるものであり、平均律による現代楽器で忠実に再現することはできない。なお単純なメロディーが歌唱者の微妙な節まわし(小ぶし)によって生かされている。これらは、正確には記録し得ないということも、お断りしておかなくてはならない。

4 楽譜中の小節線は、一応の目安として設定しており、拍節とは必ずしも一致しない。テンポは「 \parallel TT \sim 80程度である。

5 大太鼓「 \sim 」が標準である。

右の第二小節を「 \times 」と打つこともある。

6 労作歌には、新しい歌詞で歌われることも多いため、第一節歌詞の部に載せた以外の歌詞を示しておいた。

7 採譜は、すべて福岡孝義が行った。

田植うた (五月ごりょういが)

昭和38年(1963)
唄 中村 周平

イヤーレごがつごりょういがー

またきたーそーな おやのかたー

からーまーきーがーくるショガエー

以下の六曲は、第一節歌詞の部一の労作歌のものである。

田植うた(五月ごりょういが)

平目うたともいわれる。

ヤーレ姉と妹に

かすりを着せりや

どつちが姉やら妹やら

ヤーレ熊野筆屋の

筆司のうたを

山の木がやも

聞きやなびく

(地づき歌の歌詞でうたうこともあ

= 以下同じ

麦打ちうた

昭和38年(1963)

唄 中村 周平

ハア ーラ しん-しょうどし-まの- エ ー-ー イエー

ヨ (ハア) こめ-やの-む ー-ー す-め ー こめ の

なるきを-ま-ー-だ し-らぬシヨング エ-ー ハア ヨイサヨイサ

I 生活誌編

② 歌詞追加

麦打ちうた

ハアーラ安芸の熊野の

エーエイエヨー

筆屋の娘

米のなる木を

まだ知らぬ

シヨングアエー

ハアーラ米のなる木を

エーエイエヨー

見たくば見やれ

六畳たみみの

裏見やれ

シヨングアエー

ハアーラ毛もみや楽でも

エーエイエヨー

箱つきやできぬ

筆司や見たよな

楽じゃない

シヨングアエー

筆つくりうた

昭和38年(1963)
唄 中村 周平



イ ヤ レさむやきたー かぜー ーきょう みなー みかぜ よ
イ ヤ レとのごさんー よいー ーかな らずー よそで よ



あすはうきなのー ー たつ みー かぜ よ
うわきなさればー ー それ がー いとま よ

歌手の気分次第で相当自由に伸縮される、当然こまかな小節もつく

二、	一、
それが暇よ	筆つくりうた
浮気なされば	イヤーレ
必ずよそでよ	寒や北風
殿御さんよ	今日南風よ
イヤーレ	あすは浮名の
辰巳風よ	

地づきうた

昭和38年(1963)
唄 藤本 勝三



ハ アー み ずはさ かー さ ー ー ま ハ シャント



ャント くまのー ーのみー ーずは ドンドン



あーとにー なーがー れーてコリャ せのーにゃー ーでーるよ



ショコホイイショコー ホリキヤデー ホー ーホイ ホーイ

地づきうた

昭和38年(1963)

唄 金谷 誠一

どれもどなー たー も アリヤ ドン おう
 たー い なー さー れ うー た じゃ
 ごー きー りょう が コリヤ さー りゃー せー ぬよ アリヤ
 シャカー ホイイシャカ ホリキヤジャー ホイホイホイ ホーイ ハー

◎同一の唄の変化と思われる。♩=♩

地づき歌

ハアー安芸の熊野へ

一度はおいで

恋の文かく筆どころ

ハアー安芸の都よ

熊野の町は

姉も妹も筆つくる

牛若踊 (神楽踊、萩原区)

昭和38年(1963)採譜

以下の六曲は、第一節歌詞の部四の踊り歌のものである。

I 生活誌編

インヤレー きょう ー ー い ー ち ー ば ん ー ー
 インヤレー ひ ー ー ー だ ー ー り ー お り ー ー

の ー ー ー え ー ー ぼ ー ー し ー ー や ー ー よ
 え ー ー を ー ー あ ー ー つ ー ー ら ー ー え ー ー て

1.
 ヤレー きょう ー ー い ー ー ち ー ー ば ん ー ー

の ー ー ー え ー ー ぼ ー ー し ー ー や ー ー よ

2.
 ヤレソリヤエ ー ー ひ ー ー ー だ ー ー り ー ー お り ー ー

え ー ー を ー ー あ ー ー つ ー ー ら ー ー ー え ー ー て

宮島踊 (神楽踊、城之堀区)

昭和62年(1987)採譜

(本節)

インヤ ハレ さ ーん ー ご ーく ー い ーち ー
 インヤ ハレ い ーか ー な ー る ひ ーと ー

の ー ソレ み ーや ー じ ーま ー は エ ーエ
 の ー ソレ お ーた ー て ーあ ー る エ ーエ

ヤレソリャエ ー み ーや ー じ ーま ー は ー
 ヤレソリャエ ー お ーた ー て ーあ ー る ー

節変ワリ

ヤ ハ アアア に ーが ー ーつ ひ ー

ーて ーえ ー に ー ーだ ーい ーく ーし

ご ーと ーが は ー ーじ ーま ー り ーて

エ ー ヤレソリャエ ーは ー ーじ ーま ー り ー て ー

本節モドリ

購入踊 (神楽踊、呉地区)

昭和38年(1963)採譜

I
生活誌編



アインヨ いちばんに
 ヤレヤレ
 ヨイヨイ やーりーた い
 もの は やーりーた い
 もの は アインヨ きょう いちば
 でん ヤレヤレ インヨ さらしの
 かたびら さらしの
 かたびら イン ヤレ これを
 かいてくだしてソオレ
 やりまいしゅえー
 ヤレソリャエ やりまいしゅー

御若衆 (神楽踊、出来庭区)

昭和38年(1963)採譜



唱者はこれより短三度高くうたった

白川長者 (神楽踊、初神区)

昭和61年(1986)採譜

